

永遠の一高生

——失われた青春とドイツ文学——

高 田 里恵子

水島上等兵の学歴

言うまでもなく、『ビルマの豎琴』は、ある種のイデオロギーのもとに書かれた小説である。日本人戦死者の慰霊のためにビルマ僧となる水島上等兵が語る「まちがった戦争とはいえ、それにひきだされて死んだ若い人たちに何の罪がありましょう」¹⁾という言葉は今でもどこかで聞くことができるだろう。

しかし、ここでは、そのことに直接には触れない²⁾。それより、たとえば、かつては次のような一場面が平気で受けとられていたことに、まず驚きを感じるのである。ついに日本に帰してもらえることになった「うたう部隊」の捕虜たちが、水島とおぼしきビルマ僧に帰還の日が明日に迫っていることを知らせるために、収容所の柵の外にいるビルマ人らに向かって合唱をするのだが、ビルマ僧が水島上等兵として認識される「感動的」な瞬間に歌われている曲は、旧制第一高等学校の寮歌なのだ。

それで、いよいよ明日はひきあげるという今日になってうたうと、なつかしいものばかりでしたが、ことに感慨の多かったのは「都の空」という歌でした。ごぞんじありませんかね、この歌を！あの「都の空」を！これは一高の寮歌です。この学校の生徒が召集をうけて、筆を剣にかえて学園を

立ち去るとき、友だちがこの歌をうたって見送ったのだそうです。若い人たちは何者かの目に見えない大きな手によってさしまねかれるかのように、次々と出てゆき、一ころ、この歌は朝に夕に校内にたえることがなかったといひます。この学校にいた一人の学生が、前に部隊はちがうけれども同じ町にいたことがあって、教えてくれたのです。これはいかにも若い人を見送るにふさわしい曲です。はでな、そして悲しい、心をゆるがすようなリズムです。いまでも目をつむると、胸の底にこの歌の合唱がひびいてきます。それにききると、あのころのことがまざまざと思ひうかびます。日本でも、戦争中に、あの俗な流行歌のような軍歌ではなく、この「都の空」のような名曲が人の口にのぼるようなだったら、全体がもっと品格のある態度でいることができたろうに、と思ひますね。

われわれはこの歌をうたいつづけました。そうして自分たちの苦しい若い日を嘆きながらも、なお慰められ、ふるいたつ力をあたえられるような気がしました。

ところが、ある段落で、調子を一きわはり上げたところ、誰もおもわず声をのみました。歌がぴたりとやみました。(中略)

そうして、人々が左右に分かれたところに、見ると――、あのビルマ僧がきらきら光る青い鸚鵡を両肩に一羽ずつのせて、立っていました。³⁾

周知のように、作者の竹山道雄は一高のドイツ語教師であったが、だからといって、いや、だからこそ、自分の学校を、しかも自他ともども認める当時のエリート校を、このように手放して賞賛してよいはずはない。つまり、現在のような、学歴社会批判が無批判になされてしまう場所では、この行為はあまり歓迎されないだろうというわけだ（従って、本当に注目すべきなのは、竹山道雄の堂々たるすがすがしさなのだが）。因みに、1985年に製作された「文部省特選」映画『ビルマの豎琴』では、この場面で「都の空」は登場しない。

「都の空」という歌を覚え知った経緯を語る部分では、むしろ、この「音

楽学校を出たばかりの若い音楽家」を小隊長に頂いた「うたう部隊」には一高出身者がいなかったこと、さらに他の旧制高校出身者もいなかったことが明らかにされると見たほうがよいだろう。実際、物語が始まった直後に「もちろんお百姓や労働者だった人が多いのですが、わが隊の合唱はずいぶん高尚なむずかしい曲までこなしていました」⁴⁾とされている。一高寮歌（もう一つの危機の場面では「嗚呼玉杯」が歌われ、これは映画にも出てくる）をこのように歌える者たちとは、一高の出身者か、あるいは反対に旧制高校に無縁な者かのどちらかにちがいない。にもかかわらず、『ビルマの豎琴』の背景に一高があることが、しばしば指摘されてきたのはどういうわけであろうか。学徒出陣した教え子たちの戦死が、一高ドイツ語教師竹山道雄に『ビルマの豎琴』を書かしめたことを、作者じしんが語っているからだろうか。昭和二十三年にこの本が単行本化されたときに付けられた「あとがき」では、水島上等兵として、はっきりとひとりの一高出身者の名前が挙げられる。

この本の校正をしながら、私はたまたま「はるかなる山河に」——東大戦歿学生の手記を読んだ。

これほど心をうごかされた本はなかったが、この戦歿学生の中には私が知っている人もいくたりかいる。ああ、この人も——、と思いながら読んでみると、中村徳郎君の手記があった。この人については浅からぬ思い出がある。昭和十五年の二月のことだったが、中村君が学校を長く休んで消息も分からず、どうしたことかと案じていると、新聞に彼の三本槍雪中登攀の壮挙が報ぜられた。いまあの人がこれほどにもふかく考え感じていた文章に接して、追懐にたえないのである。

中村君については「比島方面に向い以後行方不明」とある。しかし、彼の友人の一人は「中村は生きている。きっとまだ生きている」といっているそうである。それは、「《ビルマの豎琴》を読んでそう思った」というのであるが、これをきいて私は感慨がふかかった。そういわれてみれば、

中村君はそんな人だった。そして、作者は自分の空想が生み出したものが何か事実の裏書きをされる思いがして、うれしかったのである。⁵⁾

このように、とりわけ水島上等兵は一高生であった。彼の行為は、竹山教授にとって、最も「一高生的な」行為（それが何であるかは、おいおい明らかになるとして）であったのだ。しかし、より重要なことは、水島上等兵が永遠にこの一高生にとどまることなのである。ここで強調したいのは、しばしば言及されてきた『ビルマの豎琴』の背後に存在する一高および一高生というものではなく、この一高生が永遠に一高生のままでいられるということだ。

竹山道雄がのちに、「一高は官僚を育てた巣としても半戦犯的に白眼視されていて、何かと肩身がせまかった」⁶⁾と述べているように、一高を卒業してしまえば、竹山が『ビルマの豎琴』のなかで繰り返し賞賛し、敗戦後の日本を真に支える国民像として提示する「人目につかないところで黙々と働いている人」⁷⁾にはならない可能性のほうが高い。「一高」が、近代日本において果たした役割上決して無垢な存在ではありえないことを、竹山道雄もよく承知していた。「まだ若木のような、けがれを知らぬ人たちが、家を離れ、職場を去り、学窓を出て、とおい異国にその骨をさらしました。考えれば考えるほど、痛恨にたえないことです」⁸⁾という水島上等兵の言葉は、そのまま、出征して二度と帰らなかった学生たちを見送った竹山教授の執筆動機となるだろう。が、この言葉と、「世には少年時代には実に美しくても、久しぶりで大人になってから会ってみると、十七歳のころの倅はあとかたもなく消えて、その代わりにただ『凡庸』という字が全身に書いてある、そういった男がよくいます」⁹⁾という、「失われた青春」のなかの言葉（これは、まさしくエリート校教師の感慨だ）とは、残酷にも一致してしまうのだ。竹山教授、あるいは一高生の伝統にそった言い方に従えば「竹山さん」にとって、一高生は「けがれを知らぬ」まま若くして死んでしまわなければならない。水島上等兵が豎琴で最後に奏でる曲は「あおげば尊し」であるが、しかし、

彼じしんは学校を卒業しないだろう。彼には、戦後という墮落はない。作者は、水島上等兵に「永遠の一高生」という戦死の代わりに、それと同じ意味をもち且つそれを上回る役割、つまり生き残ったけれども一生ビルマにとどまり戦死者の慰霊をするという役割を与えたのだった。水島安彦という名前は、鎌倉の墓地にある戦死者の墓標から取ったという。彼は、はじめから死者なのである。

このように見てくると、平川祐弘が「部下のことで思い悩むインテリの小隊長には、戦中戦後、一高の幹部として学内行政で苦慮した竹山教授の心境がにじみ出ている。それと同じように、実直な古参兵にはこれまた実直な一高の事務職員の姿が映し出されていたのではあるまいか」¹⁰⁾ と言っているのが（無論、多少苦笑という感じを伴いつつも）、ひじょうによく納得できる。つまり、『ビルマの豎琴』に描かれているのは軍隊ではなく、学校だったのだ、たしかにあれは戦争物語ではなく、一篇の美しい学校物語なのだ、と。教師と生徒のあいだの、そして生徒と生徒のあいだの（さらには、職員も含めて？）選ばれた男たちの共同体が作る一高物語なのだ、と。

そのことを反対側から裏付けるのが、レッドパージ反対を掲げ昭和二十五年十月に駒場で起こった試験ボイコット事件に対して取った、竹山教授の態度である。竹山にとって、ここでは学校が軍隊と化した。ストライキを指導する「左翼学生」たちの行動を「数年前にうけた軍隊教育が役に立っているのであろう。指揮一下によってうごく団体行動はあざやかである」¹¹⁾ と表現する竹山は、憎悪を隠さない。

戦後かならずおこるという青少年問題も、敗戦五年にいたっては真に深刻なものとなった。学校ももはや、わたしなどがなじんでいた学校というものとは別のものとなってしまった。今回の事件を境として、むかしのような情誼的な気風はいよいよ地を払ってしまうのではないかと思われる。¹²⁾

『ビルマの豎琴』の軍隊がもっているのが、この旧制高校の「情誼的な気風」であることは明らかだ。作者の空想が生み出した、現実にはあり得ないものとは、「埴生の宿」のメロディがもたらす日英兵士の交流でも、ビルマ僧となる元日本軍兵士でもなく、旧制高校的軍隊であった。

1903年生まれ竹山道雄は、ちょうど第一次大戦後の軍縮時代に青年期を迎えており、ほとんど軍隊経験をもたないそうだが、最初は少年向きの読み物として童話雑誌に連載されたこの小説に描かれた軍隊が大日本帝国の軍隊の現実とかけ離れていることぐらいは、知っていたろう¹³⁾。決して作者の未経験が軍隊を学校に変えたのではなかった。そしてここでは軍隊の現実とは戦闘の激しさや殺戮の残酷さを指しているのではない。それは、『ビルマの豎琴』にも描かれていないわけではなかろう。そうではなくて、軍隊的なものがもつ、高等教育への、とりわけ旧制高校教育への憎悪が問題なのだ。「昭和十九年の一高」という竹山のエッセーは、一高教官たちがいかに軍の支配から学校を守ろうとしたかを伝え、生徒たちが無意味な軍隊的強制や秩序を軽蔑する様子を描いている。「『学校ハ軍隊ノ一部ナリ』という句を公文書に挿入しようとし」¹⁴⁾た配属将校の意図は、激論の末、退けられたのだった。あるいは、軍需工場への勤労働員のさい、同じ工場で働く地元の青年学校の若者たちが、軍隊的な規律と号令のもとで神棚を拝み、食事の前に呪文のような感謝の言葉を唱えるのに対し、「一高生は定刻にきもしなければ、敬礼もせず、呪文も唱えなかった」¹⁵⁾。一高生こそ国家の方針とともに歩むエリートだと思っていた地元の人々は失望し、とまどう。「あの軍国化された工場町にあっては、一高生の生活はそれ自体で反抗であり、挑発であった。ある場合には侮辱としてうけとられた」¹⁶⁾と竹山じしんも書いているが、戦時中にも保たれたという、一高生の毅然たるリベラリズムを称揚しようとする竹山の意図に反して、勤労働員地の一高生たちが妙に不快に思われてしまうのはなぜなのか。一高生の態度は、青年学校の若者にとってはたしかに侮辱なのである。

軍隊と上級学校との対立は、日本がお手本としたはずの西欧近代には見ら

れない、わが国独特の性格であるが、『ビルマの豎琴』は、この対立を消さそうとする、あるいは上級学校の原理の最終的な勝利を宣言する。そのようにして、竹山道雄は、愛する教え子である戦死した高学歴者たち（本稿では旧制高校卒業者を指す）を慰霊しようとするのだ。あるいは、彼らだけを慰霊する、と言ってもいいだろう。

日本文学研究者のルイ・アレンは、『ビルマの豎琴』が筋の進行とともに、戦争の恐ろしさを描き反戦を訴える物語の範疇を脱してしまうと言うが、それは正しい指摘であるとしても、仏教的・宗教的な色彩を帯びてくるという見方は、いかにも西洋人らしい誤解であろう¹⁷⁾。竹山じしんも仏教的メッセージを否定しているが¹⁸⁾、そうでなくとも、仏教が近代日本の文化や高等教育に与えた影響が驚くべきほど小さいことを、われわれはよく知っている。外国人の目に仏教的と映った態度、仏教国ビルマへの評価と映った言説（たとえば、産業化批判、教養重視、自己犠牲など）は、軍隊的なものに対抗する旧制高校的（ただし、決して帝国大学的ではない）なるものの主張だったのである。

もちろん、ここで考察していきたいのは、理想と現実のギャップ、あるいは正確に言えば、その溝を覆い隠そうとする無意識的・意識的工作である。それが、この作品の背後にあるという一高を、一高センチメンタリズムを共有しない者にとっては、いくぶん不愉快に感じさせる理由ではないのか。

二つの真空地帯

よく言われるように、日本の軍隊では、高学歴者がその経歴を尊重されることはなかった。やはりビルマを舞台としている、会田雄二の『アーロン収容所』のなかには、下級兵士である作者が帝国大学を出てカレッジの講師をしていたということをイギリス人にどうしても信じてもらえず、英語ができるためにかえってスパイではないかと疑われた体験が記されている。イギリスでは、軍隊内部の階級は、軍隊の外での社会的位置をそのままうつしているのです、会田のようなケースは考えられないらしい。多田道太郎は、野

間宏の『真空地帯』についてフィガロ紙が述べている言葉を紹介しながら、大日本帝国の軍隊経験者なら誰でも知っていることを理解できない西洋人の言葉を異様なものと感じとってしまった自分自身の異様に驚いてみせる。フィガロ紙は、「どんな本を読んでも、また軍隊のどんな記憶をたどってみても、フランス人にはここに描かれた軍隊社会の観念を得させることはできないだろう」と言う。ここでは「市民生活における価値は一切消滅している」。さらに、フィガロ紙が軍隊とりわけ内務班内の階級差に基づく暴力と侮辱のみに触れていることに対して、多田はその見落としを指摘する。欧米人には想像もつかないことであろうが、階級とともに、何年軍隊の飯を食ったかという序列が軍隊内の人間関係、すなわち抑圧と被抑圧の関係を決定するのだ。旧制中学卒以上の学歴をもつ者には幹部候補生の道があったが、多田は「幹部候補生となった私は、星の数の私よりも少ない古年次兵にしばしば殴打された」と報告しもする¹⁹⁾。『真空地帯』にしる『俘虜記』（大岡昇平）にしる、そして『はるかなる山河に』にしる、日本の軍隊（戦争ではない）のいやらしさを描いたとされるものが、高学歴者の視点からの記録であるのは偶然とは思えない。「周知のように日本の軍隊における下士官の生活は、小自作農のそれよりは遥かに快適なものである」²⁰⁾ とは、『俘虜記』に見える言葉である。こうした下士官たちは、やはり軍隊を経験した丸山真男に言わせると、日本の軍隊あるいは天皇制ファシズムの本質を形作るそうだが²¹⁾、下士官タイプじしんはそれに気づくことはあるまい。問題は、抑圧や侮辱そのものではなく（大西巨人が言うようにそれは軍隊だけにあるわけではないのだから）²²⁾、それを不当と感ずることができる高学歴者の特権なのである。

竹山道雄は、すでに引用した「あとがき」のなかで「これほど心をうごかされた本はない」として『はるかなる山河に』に触れているが、この東大戦歿者手記に描き出され、且つ『ビルマの豎琴』ではまったく無視されたものに気づかなかったはずはなかろう。『はるかなる山河に』（さらに、その弟分と言える『きけ わだつみのこえ』も含めて）が伝えるのは、戦争の悲惨さでも死の恐怖でも犠牲死の虚しさでもないのだ。語り手の全員がすでに死者

であるにもかかわらず、水島上等兵が見た「罪なく」して死んだ戦友たちの累々たる死骸はここにはあらわれず、ただ、『真空地帯』に描かれたような大日本帝国軍隊の隠微な抑圧と無意味な規律と、それに苦しめられる高学歴者たちの姿が浮かび上がってくる。それを一言で表現すれば、友情の欠如である。それが、若いまだ「けがれを知らぬ」高学歴者たちには心底こたえたと見える。ただし、たんなる友情ではない。『ビルマの豎琴』を旧制高校と結びつけるものである友情、選ばれた場所で選ばれた者だけが享受できる、あの特権的な男と男の友情が、同じように男性だけの「真空地帯」である軍隊では成立しないのだ。典型的な手記をひとつ引用してみよう。上級生にも、^{さん}を付けずに互いに呼び合う、分けへだてのない友情共同体の伝統が（一高よりも深く）ある（という自己理解をもつ）第三高等学校の出身者の日記である。

私は十二月十五日以来三月上旬まで、同じ班にいたのだが、私は友としての彼等にはすべて失望した。彼等は要領よく立廻るか、生まれつきの軍人の様に、或る点で話の分らない男かどちらかであった。勿論高校時代から知っていたNや、早稲田から来たN、四高から来たH等はよく話し合った。然し結局私は一人の友達も持たなかった。私は私自身の内部にもその原因をみつけて肯定するけれども軍隊生活にもその責があったのだと思う。即ち各々の生活が、各々の生活として精神の内部に育っていても、同じ二等兵の、或は同じ一等兵の生活をしている私達には友達とは寧ろ煩いものであったのだろう。私はその結果友情に飢えていながら私の方で友情を拒絶していたのだった。又、私の中学時代の親友で既に少尉だったKや見習士官だったTも同じ部隊にいた。私はよく遊びに行っている面倒をみてもらったりしたが、この場合は階級が間に入って、どうしても親しめなかった。²³⁾

さらに他の学生たちの手紙も引用しておこう。

自由を謳歌し解放を思うさま享樂した高等学校から冷たい軍紀と厳しい束縛とに凍てついた様な海兵団に入った時どんなに俺は愛情を欲したのか。奔騰する憂国の至情も逸脱を許さぬ朕に押さえられて只管俺は愛情を、ニイチェの所謂『唾棄すべき同情心』を求めた。²⁴⁾ (一高・東大法)

軍隊に入って、今までの環境、殊に友人達のよさがしみじみわかります。過去の友人の馬鹿ぞろいがしみじみと有難い気がします。勿論ここでも心から話せる友がいるのですが、大きな流れはそんなものとは異っています。²⁵⁾ (広島高・東大文)

『はるかなる山河に』には南原繁と辰野隆の序文が付いているのだが、二人の老教師たちの格調高い悲しみ方に対し、満州で軍隊を体験した若い教師のあとがきは、戦歿東大生たちのこうした具体的な、それゆえにいくぶん卑小にさえ見える失望に触れてしまう。

大学で出陣する学生を送ってから、数ヶ月ならずして、私も亦彼等のあとを追うて応召した。令状に接したときの気持は、不安や動揺や未練やいろいろなものが複合していたが、『喜び』がその大きな部分を占めていた事はたしかである。祖国と運命を共にして、祖国のために死のうということは、自らの内心の命令であったにも拘らず、容易にこの祖国と一体に成り得ない割りきれない悩みに常に陥っていたからだ。これで割り切れる、すべてすっきりする、という感懷が私の全身を洗ってくれるように思った。

だが、此の『喜び』は長く続かなかった。入隊して、夢はただちに破られてしまったのだ。軍紀厳正を信じ、神のように聖なるものと思いこんでいた皇軍の現実の姿は、一般社会人には想像することもできない腐敗しきった社会であった。²⁶⁾

ここで腐敗と言われているのは日本軍の満州での残虐行為ではなく、軍隊内部での抑圧と侮辱と阿諛とを指しているわけだが、この索漠とした風景と対照的なのが、『はるかなる山河に』の編者が言及している『ドイツ戦歿学生の手紙』の内容である。第一次大戦で戦死した大学生とギムナジウム生の手紙（原著は1918年刊・ヴィットコップ教授編）は、1938年に日本でも岩波書店から翻訳出版され、多くの読者を得た。『はるかなる山河に』の編者は、しかし、このお手本ともなったドイツの本を批判する。

私達はこの本に似たものとして『ドイツ戦歿学生の手紙』を持っている。この本の多くの手記がこれについてつづられ一様に或る感激をもって読み終わった事をするしている。それはたしかに感激に値する本だ。しかし私達はそれよりもこの本を推したいと思う。ことに編集態度について私達はヴィットコップに数等まさると自負している。彼がドイツ至上主義を吹き込む事を主眼としたのに対して私達は人間性を強く出す事を目的とした。私達の編集した手記にはなるほど戦闘の激烈な情景はほとんどない。これは日本軍の比類ない嚴重な検閲制度によるものと考えられる。この点、『ドイツ戦歿学生の手紙』の方ははるかにいきいきとしているだろう。けれども、私達の指摘したいのはドイツの思想の貧困さだ。あのドイツの思想家達のはい出にもかかわらず若い人達のこの貧しさ。それこそ二十年をまたずにナチスの興隆を許した理由ではなかろうか。私達はこの本に収められている諸篇が決して思想に富んでいると主張するのではない。ただ私達のいいたいのは、発表する自由こそ持たなかったけれども、考える自由をこれほどまでに強く持っていたという事だ。私達の学友は少なくともこの考える自由だけは持っていた。²⁷⁾

『はるかなる山河に』は占領下の検閲を受けており、いわゆる軍国精神を謳いあげるような表現は削除されているそうだが、そもそもの編集方針が、疑問をもち矛盾に苦しむ、つまり編者の言葉で言えば「考える」ことのでき

る高学歴者たちの声を集めるというものであった²⁸⁾。すると、ドイツの戦歿学生たちの「貧しさ」とは、考えることができない、あるいは考える必要がないというところにあったことになるだろう。だとすれば、まず問わねばならないのは、日本人高学歴者がその「貧しさ」にこそ感激してしまった理由である。すべてが済んでしまったあとに、ナチス興隆との繋がりを云々するのは安易なだけで、時にはかえって問題を見落とすことにもなるだろう²⁹⁾。

1952年にドイツでは、第二次大戦版の『ドイツ戦歿学生の手紙』が出版されており、すぐに第一次大戦版と同じ訳者によって邦訳も出た。第二次大戦版のドイツ人編者がヴィットコップの本を、同じように人間的・感動的な記録と見なしているのに対して、邦訳者が二つの書物の違いを必死に強調するのは、やや奇妙な印象を与える。「今度の手紙を、第一次大戦の時のに比べてみると、全く異った気分支配されている。(中略)彼らは第一次大戦の時のように思いあがったところはなく、謙虚で、人間らしい優しさを豊かに示している」³⁰⁾と邦訳者は力説するのだ。この邦訳者は、十五年ほど前、第一次大戦時の手紙を訳したおりに、「敗戦のドイツが二十年を出でずして、今日の日ざましい復興を見せたのも偶然ではないことを知るのである」³¹⁾と親ナチス的な発言をしてしまっただけに、今では、あらゆるところから何が何でもナチスの影を追い払わなければ気が済まないらしい(ドイツ人編者のほうは、そのようなことはしていないのに)。邦訳者は、戦時中最も活躍するナチス文学紹介者となる高橋健二である。竹山との関係から言えば、高橋は一高と東大独文科の一学年先輩であった。少々長くなるが、第二次大戦版の「訳者まえがき」を引用してみよう。

第三国家はドイツの青年の心を毒してしまったように言われるけれど、少なくともここに選ばれている青年は、むしろ謙虚な心の持ち主である。そしてゲーテ、シラー、ヘルダーリン、リルケを、バッハ、ベートーヴェンを深く心のかてとし、光と愛と命とに生きている。むしろ、ドイツのあり方に対して強い批判を抱き、心から祖国に殉じる気持ちになれないのに、

若い身心を砲火にさらさなければならなかった彼らこそ、真に受難者である。

同じ訳者が、フライブルク大学のヴィットコプ教授編の「ドイツ戦歿学生の手紙」を訳出したのは、丁度十五年まえであった。当時は日華事変のたけなわで軍国精神のいやが上にもあおられていたころであったので、第一次大戦の際ドイツ帝国に殉じた学生の表白は異常な感激をもって日本の青年に迎えられた。国内はもとより、外地の戦場からも、訳者に感想を寄せられた青年の数は少なからず、個人的なつながりをもつようになった人々さえあった。しかし、ドイツの学生の愛国的な精神だけが日本の青年を感動させたのではなかった。一応はそうであったけれど、次第に、塹壕のなかでファウストを読むドイツ学生の姿、カロッサの「ルーマニア日記」に見るように、砲煙のなかにあっても、絶えず自然に目を開き、自分の魂を凝視する瞑想者の精神が、日本の青年をひきつけるようになったのであった。民族の誇りと愛国の熱情にもかかわらず、祖国のあり方に対し、反省的にならずにはいられなかった点で日独の学生は共通の悲惨な運命を体験したのである。それが両者を深い沈静に誘った。あまりにも大きな犠牲ではあったけれど、その犠牲は無意義ではなかった。彼らは自己と祖国とを見る目を開かれたからである。第一次大戦の「ドイツ戦歿学生の手紙」が、日本の学生の手紙を集めた「きけわだつみのこえ」の機縁となったことは否めないであろう。³²⁾

高橋健二が強調する、祖国あるいは軍部のあり方に疑問をもちつつ戦争に協力しなければならなかった高学歴者たちの苦悩という構図は、すでに触れたように、『はるかなる山河に』と『きけ わだつみのこえ』（ただし第二集は除く）の編集方針であり、ひじょうに好まれた構図でもあり、そして現実の一部をたしかに言い当てていた（ついでに言えば、大政翼賛会文化部長高橋健二の苦悩もこれだということになっている）。高橋は、そのような見方をドイツ戦歿学生にも当てはめずにはいられない。しかし、第一次および第

二次大戦のドイツ人学生たちの手紙に表われているのは、いや、正確に言えば、手紙の選者が表わそうとしたのは、のちの引用で示されるだろうが、戦闘の苛酷さや死の恐怖になお打ち勝とうする若者の努力と葛藤であって、そのことを、『はるかなる山河に』の編者のほうは正しく指摘し、且つその葛藤の（日本人の眼から見た）嘘っぽさを批判している。もし、第一次大戦版と第二次大戦版の手紙の違いを、あえて探すならば、手紙のドイツ人選者がそうした若者の態度を「ドイツ的」と賞賛しているか、それとも「人間的」と呼んで涙するかという違いのなかにのみ求められるだろう³³⁾。

いずれにしろ、注目しなければならないのは、似たような書物でありながら、それゆえに見えてきてしまう日本とドイツとの差異であり、その差異が軍国日本の高学歴者たちを魅了したということである。さて、その違いとは何か。

まずは、竹山道雄によって水島上等兵のモデルの一人として見出された中村徳郎の手記から引用してみよう。中村徳郎はまた、家族に宛てた外地出征前の最後の手紙に登場する言葉、「一切が納得が行かず、肯定できない」³⁴⁾という言葉によって『はるかなる山河に』（および『わだつみ』）が表わそうとしたあの苦悩を代表する人物でもある。中村はドイツの学生への羨望を語り、高橋健二が後になって、ドイツ人学生の愛国精神ではなく、ファウストを読み自然を愛する心が日本の若者に感動を与えたのだ、と力説できる根拠を与えている。因みに、中村が外地出発前の最後の外出の際に古本屋で見つけ購入したという掘り出し物三冊のなかの一冊は、大政翼賛会文化部長高橋健二著『文学と文化』であった。楽しみにして外地にもっていく、と中村は記している。

再び『ドイツ戦歿学生の手紙』を読む。何回繰り返して読んでもいい。此所に居て読むと殊に感激が深い。彼等は真摯だ。塹壕の中で、蠟燭の灯の下で、バイブルを読み、ゲーテを読み、ワグネルに想いを寄せる彼等は幸福である。寄せ得る彼等は。

死骸の中から取出した手記に、決して敵を誹謗する文句がない、という記録は注目に値する。

斯かる真面目な偉大な学生を有つ独逸民族の底力を羨ましく思う。あらゆる理論を超服した死の克服、果敢な突撃、夫等が必ずしも日本軍にのみ特有のものではないと知る。陶冶された崇高な理性の真の強さを又しても信ぜずにはいられない。³⁵⁾

『ドイツ戦歿学生の手紙』には、もちろん、死への恐怖や戦闘の残虐さのなかで苦悩する学生たちが描かれているのだが、それらはつねに効果的な背景にすぎず、主題は、その苦悩が結局は報われ、また他者によって理解されるということである。自国の文化や民族との繋がりを、高学歴者たちがごく自然に維持している、そして「斯かる真面目な偉大な学生」の姿が「独逸民族」のあいだでごく自然に承認され尊敬されている（繰り返して言っておけば、そのように手紙が編集されている、ということであるが）。たとえば、戦場でゲーテの詩を読んでいた学生に、部下の一人である商人が詩の朗読を頼む。

その商人は婚約していたので、恐らく一層感じやすくなっていたのでしょう。僕は手短にゲーテの生涯とワイマルの公園とゲーテの家などの話をしやり、それにあてはまる詩を読みました。僕が読んでいると、一人また一人と寝ている穴から匍い出て来て、傾聴しました。そこには工場労働者や作男などがいたのですが、いくら読んで聞かせてもゲーテに飽きないのです。(中略) 一時に僕はやめました。でなかったら、彼らはもっとながく傾聴していたでしょう。掩蔽部の中は一つの気分に溶けていました——ゲーテに対するこんな感激を僕はまだ味わったことはありません。³⁶⁾

これは、どこか『ビルマの豎琴』の雰囲気を感じさせるだろう。竹山道雄が「埴生の宿」による日英兵士の交流という架空の話を、第一次大戦時のク

リスマスにおける英独両軍の交歓を元にして作ったという説に同意したくなる。たしかに、これは西洋的・ブルジョワ的もしくは白人的風景なのだから。

さらに、「戦場で絶対必要な戦友同志の友情」³⁷⁾、「全ドイツ軍を貫いていて、互いにお前と呼び合っている一般的な戦友気質」³⁸⁾（傍点原文）、つまり、一つところに属しているという感情に支えられた男と男の、階級を越えた友情が、『ドイツ戦没学生の手紙』では至るところで語られる。少々いじわるな言い方をすれば、この軍隊では、高学歴者の特権意識と、平等への曖昧な憧れとが同時に満足させられるのである。もちろん自らを犠牲にすることなど、そう簡単にできるものではないが、しかし、そうした葛藤のなかで彼らは鍛えられ「男」となるのだ、そうならねばならない、と。

卑しさと利己心が追放され、忠実と名誉とが再び昔の権利を取返すような、美しい偉大なドイツに対する信仰のために、僕は戦い、恐らくはまた死にもします。そうしたドイツから我々はまだ遠く遠く離れています。我々はまだ余りに弱い利己的な人間であって、ほんとうの男ではありません。実際、僕の仲間にそうなっていないものが多いのを見て、僕は一層厳粛になりました。³⁹⁾（傍点原文）

こうした自己犠牲の精神を「男らしい」と見る視点は、『はるかなる山河に』にも『わだつみ』にもしばしば登場する。繰り返し言えば、日本人学徒兵から感じとれるのは、戦争拒否と言うより、軍隊嫌悪なのである⁴⁰⁾。

日本研究者ローデンは、旧制高校についての研究書のなかで、戦争中の旧制高校生たちが「同年齢の勤労青年より犠牲的だった」⁴¹⁾ ことを指摘しているが、そもそも旧制高校生にとって「男らしい」自己犠牲は、小市民的エゴイズムを抜けてねばならぬ（と思っている）エリートの不可欠の条件であり、上級学校における共同体的生活とりわけ寄宿寮はそれを確認しあう場所であった。すでに述べた男と男の特権的友情は、こうした自己犠牲の上にのみ成り立つというわけだ。これは軍隊における戦友感情の「理想」にほかならず、

『ドイツ戦歿学生の手紙』が示すとおり、とりわけ第一次大戦の敗戦後のドイツにおいて高く評価されたという⁴²⁾。この書物が日本の学生たちに受けた理由は明らかである。ここに描かれた軍隊の世界は、日本の高等教育機関の雰囲気に近いのだ⁴³⁾。ここでは、戦争にかりだされた日本の若い高学歴者たちが求めたこと、つまり、真の意味でエリートたらしめる高貴な精神を正しく理解してもらえること、が実現している。

だが、大日本帝国の「真空地帯」は違っていた。軍隊は第一高等学校とは違って、反小市民的な気高い男性同盟の場所ではなかった。そこには日常的な瑣末主義、小市民的な狡さ、女々しい陰湿さ、卑しい物質主義が満ちあふれていた。それでもなお苦しみつつも「男らしく」あらんとする姿、それが、のちの平和な日本で最も好まれる戦歿学生の象徴となるだろう。たとえば、それこそ一高の寮から「都の空」とともに出征した鷲尾克己は、特操（特別操縦見習士官）の腐敗のなかで、なお「男」となる道を求めている⁴⁴⁾。

特操に誇りなし。伝統なし。良き運用なし。良き指導者なし。いたずらに石中の玉をも曇らすのみ。曾我いわく「こんな空気の中で張りきってもだめだ」いたずらに物笑いとなり狂人扱いせらるるのみなり。

狂人や可なり。物笑いや可なり。多衆の物笑いとなり、狂人となる、また、男子の本懐ならずや、再考せん。⁴⁵⁾

『はるかなる山河に』および『わだつみ』第一集・第二集の三冊すべてに登場する和田稔は、中村徳郎と並んで戦歿学生（もしくは戦歿東大生）を象徴する存在であるが、志願して人間魚雷回天の搭乗員となる。事故にあった回天のなかから見つかった手記には、一高への賛歌が記されていた。今、国のために生命を捧げつつある自分を育てたのは、一高である、と。

第一高等学校に於ける教育は天下無比なりき。独立自歩、毅然として聳ゆるあるを感ず。一言いはばその精神は志士の精神なりき、志士の精神は闘争

の精神なりき、向陵三年の風は余のごとき小心者をすら尚幾許たりとも精神上の潔癖者たらしめ、且余をしてしばしば長上とたたかわしめたり、今ウルシーの沖縄補給路の大道に立ちて敵を待つ時、若かりし感性の時代の志士の教えを思い、しかしてその根ざしとする闘争の精神ひしひしと臍下に静まるを感じたり。人余をして傲慢たりとなすべからず。余は幸福なり。⁴⁶⁾

問題となるのは、このエリート的自己犠牲精神がもはや正しく理解されることを求めず、ついには孤独な自己満足へと姿を変えていくことである。竹山道雄は戦後、架空のドイツ人登場人物に、こんな「奇怪なニヒリズム」⁴⁷⁾を優秀な若者にもたせてしまったのは日本の軍部だけだと言わせている。そう、ナチスの幹部はもっとうまくやりましたよ、と。

奮闘する教師たち

「志士の精神」、男気を誇る武士の精神はかつて旧制高校、とりわけその最高峰たる一高の特色であったという。それが明治三十年前後から、教養主義と呼ばれる文学や哲学への志向が強くなっていくこと、これが結局戦後に旧制高校がなくなるまでその命を保ちつづけて旧制高校文化の核となることも、よく指摘される事実であろう。しかし、まず確認しておきたいのは、この一見対立するように思われる二つの傾向の共通点である。つまり女性もしくは女性的なるものの排除だ。ここでは、文学への志向もまた、男だけの友情共同体をより強く結束させる契機となるのである。ストームや鉄拳制裁が集団で行われたように、個への沈静と見なされた、そしてたしかに当初は（たとえば、魚住影雄が最初に個人主義を主張したときには）そうであったろう、文学書や哲学書の読書も集団で同じ感性を共有するための行為であり、だからこそ、ある決まった書物が必読書のように祭り上げられたのである。旧制高校生の教養主義的在り様は、本来対立するはずの志士の精神や蛮カラの行為と立派に並存できていた⁴⁸⁾。それらを、旧制高校的なるものとして括してみたい。

とりあえず女性の排除と言っておいたが、しかし、フェミニズムの観点からの批判が問題なのではなく、また、教養主義の限界をいまさら指摘しようというのでもない（限界があるから教養主義なのだ）。そうではなくて、この上級学校が他者と出会わない友情空間であり、たとえば教養主義的感性も志士の精神も（それどころか、マルクス主義思想まで⁴⁹⁾？）そのための装置として機能したことを確認しておきたいのである。だが、より重要なのは、これが学校を卒業してしまえばそれまでのものにすぎず、何より当事者じしんがそれをきちんとわきまえていたことだ。よく言われるように、帝国大学はもはやそのような場所ではなかった。旧制高校的教養主義（もちろん旧制高校的な志士の精神でもよい）の最大の特徴は、それが個人の人生において、一過性のものだということに在る。大抵の学生が帝国大学では実学を学び、それなりの立身出世主義あるいはエゴイズムを身につけ、かつて三木清が嘆いたように、大学を出て家庭の夫や父にでもなれば大衆週刊誌のキングぐらいしか読まなくなるというわけだ。このような平和で緩やかな墮落が与えられなかったことが戦歿学生の悲劇なのである。逆に言えば、旧制高校的なるものが持続しないからこそ、高学歴者たちにとって旧制高校で過ごした時間は最良の青春の思い出となり、また、官界や実業界における出身高校別の堅固な（しかしあまり知的とは言えない）結束が友情共同体の名残となるのである。「日本の組織（官庁や社会）においては、『教養』が排除と選別の十分な文化資本にならなかった」⁵⁰⁾ が、教養に関する共通の思い出は、排除と選別の機能を担う。

教育社会学者の竹内洋は「近代日本の思想や文化を考えるときには、『旧制高校を知ることが大事ですね』という、日本近代史を研究した留学生の言葉を「まことにポイントをついた名言」として紹介している⁵¹⁾。たしかに「旧制高校は近代日本の指導者や知識人を多数輩出した学校であり」、「旧制高校という社会化（価値・知識・技能などを習得する過程）装置を抜きにして近代日本社会を考えることはできない」⁵¹⁾。しかし、拙稿においてすでに明らかなように、旧制高校的なるものは実は突出したエリート性・特殊性と

は無縁であり、矛盾した表現を使えば、その他大勢の（しかし、少数ではあるが）エリートのためのものであった。言い換えれば、近代日本の発展を支えていったのは、その他大勢の普通でまともなエリートであった。だから、逆に、旧制高校的なるものを浮かび上がらせるためには、そこに属していながらそれへの懷疑や違和感を語った単独者たちの視線を借りるほうがよいのかもしれない。たとえば、寮生活の集団主義を嫌った芥川龍之介、同級生のブルジョワ的心性に反発を覚えた清水幾太郎、すでに文学の孤独に触れてしまっている『歌のわかれ』の主人公、友情共同体の欺瞞にたえられなかった『人間失格』の主人公、「新しき星董派」（明らかに一高生）の能天気さのなかに間接的な戦争協力を見てとった加藤周一等々。

しかしながら、ここでは反対の道をとってみたい。つまり、いつまでも旧制高校的な友情共同体と教養主義的感性を掲げていることができる、あるいは掲げるのを仕事とする者たちの視点に立ってみようというのだ。たとえば、「竹山さん」がそうであったような旧制高校の語学教師たち。旧制高校のカリキュラムは人文系に偏っており、従って正規のカリキュラムのなかにすでに教養主義が織り込まれていたわけだが⁵²⁾、この理由から教師たちの約六割が帝国大学文学部の出身であった⁵³⁾。もちろん、この教師たちもかつては高校生であったわけで、文学部に進学するということじたい（竹山道雄も高橋健二もそうだが、たいていは法科への進学を勧める父親の反対を押し切った行動である）、旧制高校的なるものの継続への決意表明なのだ⁵⁴⁾。さらに、授業時間数の三分の一を外国語すなわち西洋語の授業が占めており、また、この授業がたんなる語学を越えて、教養主義の志向した西洋ブルジョワ文化への窓口であったことは、数々の思い出話に語られている通りである。旧制高校生の教養主義的在り様を制度的且つ心情的に支えたのは、帝国大学文学部出身の語学教師に他ならなかった。こういうタイプがドイツ文学者に多いのは、旧制高校のカリキュラム上、ドイツ語教師の数がそもそも多かったからである。

教養主義的読書として時にさげすまれるものを性格付けるのは、その内容

ではない。そうではなくて、そこから黒々としたもの、「愚鈍なもの」⁵⁵⁾、「わけのわからないもの」を排除する態度が問題なのであり、西洋文学はその距離的心理的遠さによって、そうした操作には最適であったと思われる（従って、今日でも教養主義は意外な場所でしっかり生き延びている）。村上一郎は、西田幾多郎や夏目漱石のなかの「わけのわからないデモーニッシュなもの」が、当時の教養主義の大本山である岩波書店によって無害化されたと指摘しているが⁵⁶⁾、もちろんそれは岩波書店の所為というより、受容のされ方の問題であった。無害化ということは、当時よく読まれたゲーテやトルストイにも当てはまるだろう。鶴見俊輔は、教養主義的読書を「幼少時の原体験をそのまま中心のダルマとしてひめておき、その上に成人期以後の読書をまいてゆく」やり方と呼んで批判した。「ゲーテもジョイスも国体にもとるものであり、ロマン・ロランもトルストイも階級支配とあいられないものであるということをはっきりとつかまえ」、読書体験を自分自身の核にぶつけて、それを検討し打ち壊していくという作業がここには欠けていた⁵⁷⁾、と。

しかしながら繰り返して言えば、ここで問題としたいのは、このような教養主義的読書の限界ではない。村上や鶴見の厳しくも正しい指摘が教えてくれるのは、旧制高校の教養主義はやはり他者との遭遇、「わけのわからないもの」との対決を避けるためには有効であったということである。それが、若者の「人格の陶冶」とやらの役立たなかったわけではないし、戦時中の高校生たちも読書のなかに、現実からの逃避という安らぎを見出しえたのだ。

このように、旧制高校生の教養主義とは読者の態度を指す言葉である。それが受動的あるいはディレクタント的と批判される所以であるが、しかし、謙虚で上質な読者は、書きたがり屋だが才能のない文学青年より余ほど文化への貢献度は高いと思われる（こうした読者の消失こそ、現在叫ばれる「教養の危機」の本質であろう）。鶴見俊輔の批判をポジティブに言い換えるならば、ここでは読むこととは理解し理解されることなのである。ドイツ文学者であり一高ドイツ語教師である竹山道雄の『ビルマの豎琴』は、旧制高校語学教師を中心としたこの美しき読者共同体の延長上に位置する。

だから『ビルマの豎琴』は、「うたう部隊」のメンバーを他者と出合わさないための物語であった。敗戦を知ったとき、小隊長は兵隊たちに向かって「残っているものとしては、ただわれわれが互いに仲がいい、ということだけである。これだけは疑うことはできない。われわれが持っているものとしては、これだけだ」⁵⁸⁾と言う。この友情空間のなかでは、イギリス人もビルマ人も、「うたう部隊」の兵隊たちを理解してくれる者として登場してくる。イギリス兵は日本の歌（実はイギリスの歌）をよく知っているし、ビルマ人の物売りばあさんは、なぜか人情味あふれる大阪弁を操るのだ。

無意味に玉砕しようとする日本軍を説得するという役目を担って「うたう部隊」を離れた水島上等兵は、一見、他者のなかに放りだされたかのように見えて、その実、あらゆる者から理解されるために出かけて行く。水島の必死の説得を受け入れなかった兵隊たちも結局は生き残って水島に感謝することになるだろう。筋から離れて紛れ込んだようなユーモラスな「人食人種」の話は、「人食人種」のなかに野蛮を発見してしまう宗主国的傲慢に竹山が囚われている証拠というより⁵⁹⁾、こんな「土人」にまで理解され、のみならず「酋長の娘」には愛されてしまう水島を描くためのエピソードなのだ。その水島は死者たちの声を聞きとり、（頼まれもしないのに）彼らの無念の心を理解してやる。イギリス人戦死者の墓地に、日本人兵士たちの遺骨がわりにルビーを置くことを思いついた水島は、こう言う。

イギリス人も日本人も、おたがいに霊ははやこの世をはなれた人々です。それを共にまつることをおねがいしても——せめてその片はじに人知れずおくことをおねがいしても、よもや、亡きイギリス人たちは無礼をとがめはされぬであろう。それどころか、ほほ笑んで、手をとって、自分たちの壇の上に招じてくださるであろう。あの山の中の村での停戦の夜には、生きた人々が敵も味方も手を取りあった。それならば——。⁶⁰⁾

こうして、異なるもの、「わけのわからないもの」、あるいは差異にこだわ

る人間は、「ヒューマニスト」あるいは「永遠の一高生」たるドイツ文学者水島上等兵の手にかかってことごとく抹殺されるのである。

先に触れた『戦争はどのように語られてきたか』では、『ビルマの豎琴』は小説としてはとことん低く評価されているのだが⁶¹⁾、さらに川村湊は、この小説はナチスに加担した日本のドイツ文学者たちのアリバイとしても機能したと指摘する。

竹山道雄はもともとドイツ文学の研究者です。彼自身はナチズムには批判的であったようですが、戦中のドイツ文学の研究者たちはナチズムを宣伝したり、賛美した。戦後そこからどうやって立ち上がるか。戦中のドイツ文学者の言動を批判し、克服するのではなく、戦中の自分たちの行動を正当化する物語をつくったわけです。ビルマを踏み台にして『ビルマの豎琴』を書くことで、彼は戦後の論壇に、ヒューマニストとして登場してきたわけです。

たとえば、著名なドイツ文学者である高橋健二は文学報国会で活躍をしてナチズムの文学についても書きましたが、戦後はヘルマン・ヘッセなど、ドイツの汚れていないと思われている、無垢で普遍的なヒューマニズムを紹介するところからもう一度立ち上がった。『ビルマの豎琴』はそういう人たちの「アリバイ」としても機能したんだと思いますね。⁶²⁾

竹山は「憑かれた人々」のなかで、ナチスのために旗振りをした日本のドイツ文学者たちを半ばおちょくっており、彼らがお人好しで無防備であったが故にそのような行動に出てしまった様子を描いている。竹山は意図的に、彼らをはじめから二流の人間と見なしており、弁護を買って出るほどの関心をもっていないふうに見える。もし、竹山が「戦中の自分たちの行動を正当化する物語」を必要としているなら、すでに明らかなように、それは一高関係者のためであろう。「圧倒的に強い勢力が国をひきずっているときに、それに対して反抗したり傍観したりしていても、それによっては何事もなされ

なかった。あの条件の下で残された唯一の可能な道は、その勢力と協力して内からはたらくことによって、全体を救うことだった」⁶³⁾ というのは、竹山が戦後しばしば使う表現であるが、これが、「うたう部隊」がとりあえず侵略者としてビルマにいる（しかし小説では決して言及されない）理由である。

川村湊は、ナチスとの関わりという過去を振りはらおうとしたドイツ文学者の新しい在り様を指して「ヒューマニスト」という言葉を使っており、これはまったくその通りであるが、しかし、敗戦を機に急にそのようなものに豹変したわけではない。一種の文化人としてアカデミックジャーナリズムで活躍した有力なドイツ文学者（たいていは旧制高校教師）は、みな昔から「ヒューマニスト」であった。それが証拠に高橋健二は、すでに戦中から最も有力なヘッセの紹介者であった（昭和十七年に大政翼賛会文化部長になるまで成蹊高校教授）。高橋は『車輪の下』を、あの『ドイツ戦歿学生の手紙』が邦訳出版された同じ昭和十三年に⁶⁴⁾、そして『デミアン』を翌十四年に出版している。『ドイツ戦歿学生の手紙』は、三木清の発案で生まれた岩波新書の最初の一冊として出版され、ヘッセの二冊の代表作は岩波文庫に収められた。昭和十二年には、竹山の同僚である関泰祐が『青春彷徨』（ペーター・カーメンチント）を岩波文庫から出版している。

昭和十年代の戦時期に同時代文学として若い高学歴者つまり旧制高校の教養主義的読者に受け入れられたドイツ文学の作品は、学校（ギムナジウムなどの上級学校）、そして軍隊をテーマにしている⁶⁵⁾。これは、ドイツ本国において二十世紀初頭に学校小説が大流行を迎えたこと、第一次大戦後に戦争小説がブームになったことと対応しているだろう。高橋健二の昭和十三年の仕事、その日本での人気は、まさにこの状況を映している。ただ、戦後に『ドイツ戦歿学生の手紙』が消えさって『車輪の下』が残っただけなのである。

高橋はまた昭和十一年にハンス・カロッサの『ルーマニア日記』を、最初のカロッサ全集（建設社）の一冊として出している（戦後に岩波文庫に入る）。そして竹山道雄も同じく昭和十一年に、インテリたちには最も好まれたとい

う、この戦争小説の抄訳を『従軍日記』と題して山本文庫から出版しているのである。共訳者は、一高教授であり戦前よりヒューマニストとして名高い片山敏彦であった。軍医であるカロッサの、戦争の知的な観察者でありながら傍観者ではなく、黙々と自分の職務を遂行する献身的な姿は、「ヒューマニスト」たるドイツ文学者たちから賞賛され、インテリのためのひとつの模範として提示された。もちろん、このようなカロッサの在り様が、ナチスとの妥協という態度へと繋がっていったことは、日本でも戦後になってはじめて指摘されるのである。カロッサの学校小説『少年時代の変転』は同じく昭和十一年に、のちに『ドイツ戦争文学』（昭和十四年）の著者となる石中象治によって翻訳された。

このように、当時の有力なドイツ文学者は、たいてい、学校と軍隊のふたつに関わったのである。それは、彼らの語学教師としての生活とも無縁ではなかった。高橋英夫は、一高名物ドイツ語教師の岩元禎を扱った『偉大なる暗闇』の冒頭に、昭和十三年のある冬の午後ドイツ語の授業を終えたばかりの竹山道雄を登場させている。テキストは『車輪の下』である。「内容からいっても、ハンスや親友のヘルマン・ハイルナーの悩みは、寮生活の一高生に人ごとならぬ関心を掻き立てたようだ。どうやらこのテキストは成功だったらしい」⁶⁶⁾と架空の「竹山さん」はつぶやく。因みに『ドイツ戦歿学生の手紙』もまた、「塹壕より故郷へ」あるいは「戦地消息」と題されて、高校生用の抜粋独文教科書となっていた。

ドイツの学校物語は、ほとんど唯一の例外であるというカロッサの自伝的小説を抜かせば⁶⁷⁾、『車輪の下』に代表されるような学校批判の小説である。そこでは、教師の、あるいは同級生の無理解とエゴイズムが批判され、学校の落伍者となる孤独な魂の叫びが描かれる。反対に戦争物語では自己犠牲の精神と友情がテーマとなるのだ。そして、やがて日本の旧制高校生の現実のなかで、ドイツにおける学校と軍隊との位置が見事に入れかわるだろう。

竹山道雄の『ビルマの豎琴』は、ドイツの戦争物語に一高生たちをそっと送りこんだ日本的な学校物語なのである。それが、一高ドイツ語教師の慰霊

の仕方であった。

註

- 1) 竹山道雄『ビルマの豎琴』（初出『赤とんぼ』、1947年から48年）からの引用は新潮文庫版に拠った。186頁。
- 2) 鼎談集『戦争はどのように語られてきたか』（朝日新聞社、1999年）では、『ビルマの豎琴』は『二十四の瞳』とともに、戦後における戦争の語り方の核を作った作品として最初に取り上げられている。とりわけ『ビルマの豎琴』は「死者をいかに哀悼するか」という問題において、戦後の言説に大きな影響を与えた、と。72頁参照。
- 3) 『ビルマの豎琴』、119・120頁。
- 4) 同書、6頁。
- 5) 「あとがき」、同書、208頁。
- 6) 「ひとつの秘話——『教養学部三十年』を読んで」『竹山道雄著作集4』（福武書店、1983年）所収、225頁。
- 7) 『ビルマの豎琴』、128頁
- 8) 同書、188頁。
- 9) 「失われた青春」『竹山道雄著作集3』所収、13頁。
- 10) 平川祐弘「『ビルマの豎琴』余聞」『ビルマの豎琴』新潮文庫版所収、220頁。
- 11) 「学生事件の見聞と感想」（初出『中央公論』1950年12月号）『竹山道雄著作集3』所収、265頁。なお、竹山はこの論文のなかで、『きけ わだつみのこえ』が左翼勢力の宣伝に利用されたと繰り返し非難している。「映画『きけ、わだつみのこえ』は成功した宣伝だった。戦争の悲惨をまざまざと目の前に見せることによって裏づけながら、この論理をひろくふかく浸透させた」（262頁）。因みに、この映画では最後に学徒兵が「紅萌ゆる丘の花」という第三高等学校寮歌を歌っている。
- 12) 同論文、279頁。
- 13) 竹山は、戦後の軍隊批判について次のように述べている。「これらのこと（「外地ではたくさんの残虐行為もしただろう」ということ…引用者）を弁護できるというのではないが、ただあれは満州事変以来じつにながい、目的も目途もはっきりしない、あてのない戦争だった。末にいたっての困難は言語に絶した。どんな軍隊でも、あんなったら顔落しないではすまなかっただろう。しかも現代の戦争にはますます人間性は失われて、昔の騎士道も影がうすくなり、多くの国の軍隊が今までにない荒廃ぶりを示した。すべての軍隊に軍隊固有の『真空地帯』があり、下士官気質といったようなものは単純な人々がおち入りやすい世界共通のものである。私はドイツ軍

の末期症状について読んで、敗戦とはかくも似たものかとおどろいた。——戦後の日本軍隊への糾弾には、右のようなことがあまりにも酌量されていないと思われる」（『昭和の精神史』『竹山道雄著作集1』所収、93頁）。繰り返し言うておけば、こうした竹山的言説に対する批判はすでに十分なされているので拙論では行わない。

- 14) 「昭和十九年の一高」『竹山道雄著作集3』所収、221頁。
- 15) 同論文、220頁。
- 16) 同論文、217頁。
- 17) ルイ・アレン「『ビルマの豎琴』と『野火』——戦争文学に関する考察——」『比較文学研究』36号（東大比較文学会編、1979年）所収、127頁。
- 18) ルイ・アレンの同論文の註において、竹山の女婿である平川祐弘が直接竹山に確認したと記されている。
- 19) 多田道太郎「解説」『真空地帯』新潮文庫版所収、482頁～484頁。
- 20) 大岡昇平『俘虜記』新潮文庫版、132頁。
- 21) 丸山真男「日本ファシズムの思想と運動」『現代政治の思想と行動』（未来社、1964年）所収、67頁参照のこと。
- 22) 大西巨人「俗情との結託」『大西巨人文藝論叢』（立風書房、1982年）所収、を参照のこと。周知のように、これは『真空地帯』批判の論文である。
- 23) 東大学生自治会戦歿学生手記編集委員会編『はるかなる山河に』（東大協同組合出版部、1948年）、48頁。
- 24) 同書、94頁。
- 25) 同書、111頁。
- 26) 三井為友「『戦歿学生の手記』に寄せて」同書所収、234頁。
- 27) 「失われなかった人間性」同書所収、227～28頁。
- 28) 『わだつみ』の編集方針への批判やその変更については、岩波文庫版『第二集 きけ わだつみのこえ——日本戦歿学生の手記——』の、平井啓之の「あとがき」を参照のこと。
- 29) たしかに、邦訳の元になった原本じたいが、1933年のナチスの政権獲得直後に再発行された普及版であったために、新たに付けられた序文では、「新しいドイツ」の誕生と学生戦歿者の犠牲死との繋がりが、ナチスの紋切型をふんだんに使って強調されてもいるし、登場する学生たちはナショナリストとしか呼びようはない。
- 30) ヴァルター・ベール／ハンス・ベール編（高橋健二訳）『ドイツ戦歿学生の手紙』（新潮社、1953年）、「訳者のまえがき」7頁。
- 31) フィリップ・ヴィットコップ編（高橋健二訳）『ドイツ戦歿学生の手紙』（岩波書

- 店, 1938年), 「訳者序」, 2 頁。
- 32) 「訳者のまえがき」, 6 頁。
- 33) たとえば, 第一次大戦版の序文では「ドイツ精神のあらゆる深さ, ドイツ魂のあらゆる高貴さが, 戦争と死と祖国との地平線の前で, これらの若い勇士たちの中に姿となり言葉となった」(9 頁) と記されているのに対し, 第二次大戦版ではこの第一次大戦版に触れつつ次のように言われる。「フライブルク大学のフィリップ・ヴィットコプ教授が, 第一次大戦の終わったのち, 一九一四年から一八年にかけての戦歿学生の手紙を発表した時, そこから, 精神のまれな根本的なできごとだけに可能なような感動が発した。そこには, 人間の内面的な究極の運命が述べられていた。遺言のような力のこもったことばであった」(2 頁)。
- 34) 『はるかなる山河に』, 155頁。
- 35) 同書, 145頁。
- 36) 『ドイツ戦歿学生の手紙』(第一次大戦版), 150頁。
- 37) 同書, 51頁
- 38) 同書, 25頁。
- 39) 同書, 24頁。
- 40) 東大法科在学中に学徒兵として戦艦大和に乗り組んだ吉田満は, 『戦艦大和ノ最期』の初版(昭和二十七年)あとがきのなかで, 次のように述べている。「戦歿学生の手記などをよむと, はげしい戦争憎悪が専らとり上げられているが, このような編集方針は, 一つの先入主にとらわれていると思う。戦争を一途に嫌悪し, 心の中にこれを否定しつくそうとする者と, 戦争に反撥しつつも, 生涯の最後の体験である戦闘の中に, 些かなりとも意義を見出して死のうと心を砕く者と, この両者に, その苦しみの純度において, 悲惨さにおいて, 根本的な違いがあるであろうか。(中略) 戦争を否定するということは, 現実には, どのような行為を意味するのか教えていただきたい。単なる戦争憎悪は無力であり, むしろ当然過ぎて無意味である」(『戦艦大和ノ最期』講談社文芸文庫版, 168頁)。しかし, 「戦争憎悪」というのは, 当時あまりにもてはやされすぎた『わだつみ』に対する吉田の誤解である。むしろ, われわれは吉田の心情と『わだつみ』との類似に驚かされるだろう。
- 41) D・ローデン(森敦監訳)『友の憂いに吾は泣く』(講談社, 1983年), 211頁。
- 42) たしかに, ナチスは国民の支持を得るためにそうした共同体意識および, それと表裏一体の排除のメカニズムを利用したのである。また, 反戦小説としてナチスに非難された『西部戦線異状なし』(1929年刊・同年邦訳)がベストセラーになった理由も, 反戦メッセージのためと言うより, 戦友関係のセンチメンタルな描写のお

かけである。ドイツにおける戦友感情の特権化については、トーマス・キューネ（星野治彦訳）「戦友意識と男らしさ」『男の歴史』（柏書房、1997年）所収、を参照されたい。

- 43) 第一次大戦版『ドイツ戦歿学生の手紙』の書き手たちはドイツ青年運動に強い影響を受けた世代であり、その意味で、教養主義的読書に馴染んでいた旧制高校生には、その心情は受け入れやすいものであったと思われる。なお、ドイツ青年運動と日本の教養主義との関連については、拙論「教養主義とメディア——昭和十年代のドイツ文学者たち——」『メディアの中のドイツ文学』『文学表現と〈メディア〉——ドイツ文学の場合』（平成9年度文部省科研補助金研究成果報告書、1997年）所収、を参照していただければ幸甚である。

ところで、『ドイツ戦歿学生の手紙』が邦訳出版された昭和十三年は、また新たな面でナチスドイツが日本で評価された年であった。この年の八月に、ヒトラー・ユーゲントが来日し、規律正しく凛々しい青少年の姿、民族に奉仕する若者の心が日本各地で賞賛されたのである。昭和十三年に出た『ナチスの青年運動 ヒットラー青年団と労働奉仕団』（三省堂）のなかで、著者の近藤春雄はドイツの若者たちと比べ日本の大学生がいかに墮落し「利己的打算と小乗的成功観」に囚われているかを批判している。それに対して、旧制高校生活はヒトラー・ユーゲントのそれと同じ性質をもつものと見なされる（ただし近藤はヒトラー・ユーゲントを青年運動の延長と見ている）。「手早い話が、われわれの学窓生活を回想する時、最も愉快で感激に充ちていたのは、矢張り高等学校時代の三年間であった。（中略）事の大小こそ違え、私益を忘れて、他人に尽くそうとする公益的気持の感激は、互いに永久に忘れることが出来ない。それもこれも寮生活というああした協同体の集団生活の賜物に他ならないことを思えば、所謂、人格の陶冶とか、犠牲的精神は、決して知育のみによって醸成されるものでないことが、経験的に立証されるであろう」（154頁）。

このヒトラー・ユーゲントが「日本でもっとも由緒ある学校」を訪問したとき、彼らを案内したのがドイツ語教官竹山教授であった。ただし、竹山道雄の戦後の話によれば、このドイツの少年たちは「日本で一番印象のよかったのは幼年学校、わるかったのは一高」と言ったそうである。「しかし、玉杯の合唱をきいて、その強さに感心した」と（『昭和十九年の一高』、211頁）。

- 44) 竹山道雄は鷺尾の思い出を次のように語っている。「特攻隊に編入された鷺尾君があたらしい軍服を着て、別れを告げに学校にやってきて、その後まもなく散華したときいたのは、これよりもう少し後のことであつたろう。白状すると、私はあるとき同君と話しするのがつらかったし、いやだった。彼は何か冷ややかなものを感じ

じたのかもしれない。階段の途中でしばらく躊躇していたが、やがて思いきって段を降りてひとりで外へ出て行った。『昭和十九年の一高』、228頁。

45)『第二集 わだつみ』岩波文庫版、265頁。

46)『はるかなる山河に』、135頁。

47)『失われた青春』、8頁。

48) ローデン、前掲書、210頁参照。

49) 筒井清忠は、旧制高校におけるマルクス主義受容の在り様は、文献中心主義と西洋崇拜という点で教養主義の延長上に位置したと指摘する。筒井清忠『日本型「教養」の運命』（岩波書店、1995年）、97頁～99頁参照。ローデンは、東大新人会についてのH・スミスの研究を踏まえつつ、旧制高校における左翼グループは、むしろ帝国大学進学後も旧制高校的な共同生活の禁欲主義と男同士の友情関係を保ちつづけたと言う。そして柔道部や文芸部などと同じように、左傾学生のなかに各学校別の派閥が存在した、と。ローデン、前掲書、181頁～182頁。

50) 竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』（NHKライブラリー、1997年）、114頁。

51) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、1999年）、39頁。

52) 橋本鉦市「近代日本におけるエリート養成の教育過程——旧制高等学校の教養主義教育について——」『東大教育学部紀要』第30巻（1990年）所収、を参照のこと。ただし、竹内洋によれば、戦時体制に入った昭和十七年から旧制高校のカリキュラムは大きく変化する。「それまで三五パーセント以上を占めた外国語が三〇パーセント以下になる。体育や教練が多くなる。旧制高校的教養主義は大幅に正規のカリキュラムから後退する。」「西洋文化を中心とした教養主義は、エクストラ・カリキュラムとしての課外読書や課外活動になる」（竹内、前掲書、288頁）。さらに、これに勤労働員が加わって、授業はほとんど不可能になるわけだが、竹山道雄は勤労働員のさいにもゲーテの講読を続けたようす、一高生が灯火管制のもとでも読書を続けたようすを次のように語っている。「いま私は日立の勤労作業地にいて、夜半にいそいでこの稿を草している。あたかも昨夕から警報が発せられ、敵機がついに北九州を爆撃したという噂である。今夜の授業は、丘の上の工場附属の建物の二階で、畳敷の部屋に暗幕をはりつめて行い、ゲーテの『詩と真実』の第一巻、少年ゲーテが暁の太陽の光をレンズでとらえて蠟燭を点じ、天地を創造し愛育する神に熱烈な祈禱をささげた、というところを読んだ。生徒諸君はうす暗い灯火の下で熱心にきいている。ただ、私の左側に坐っている人は、昼間の労働に疲れたのであろう、ずっと俯伏して眠っている。ときどきあわてて太ももをまくりあげて蚤をつぶす人もあ

る」(「空地」, 215頁)。「そうしてまた記憶しておきたいのは、こういう時でもなお、ある人々は実によく勉強していた。そういう人は工場から帰って、唯一の終夜灯のある廊下に椅子をもちだし、その上に本をおき、床に坐って、マントをかぶって、熱心に読書をつづけていた。これは規則に反することであり、健康にも気づかわれることではあったが、私はこれを制しかねた」(「昭和十九年の一高」, 229頁)。教養主義は戦時下でもこのように、いくぶん芝居がかって生き延びていた。本文中でも触れるが、昭和十年代の教養主義の復活は、インテリの、軍事体制という現実からの逃避と見なされている。ところで、『戦艦大和ノ最期』の吉田満は、海軍の士官になって案外学生時代より暇があったので、「トーマス・マンの『魔の山』なんてのを、一生懸命読んだりしたんですけど」と述べている。島尾敏雄・吉田満『特攻体験と戦後』(中央公論社, 1978年), 51頁。

53) 橋本鉦市「近代日本における『文学部』の機能と構造——帝国大学を中心として——」『教育社会学研究』第59号(1996年)所収, 102頁。大正末年の各高校一覧から集計した数字だという。

54) ここでついでに言うておけば、徴兵猶予の停止は理系の学生には適用されなかったもので、戦死した学徒兵はだいたい文系の学生であった。竹内洋によれば、「昭和十八年の東京帝国大学文学部の入学者では八パーセントが入隊し、戦場に赴いている」という。竹内, 前掲書, 290頁。

55) これは、蓮實重彦が、「才能のある」「凡庸なもの」の反対語として使用した表現である。蓮實重彦『凡庸な芸術家の肖像 マクシム・デュ・カン論』(青土社, 1988年)を参照のこと。

56) 村上一郎『岩波茂雄』(砂子屋書房, 1982年), 36頁～39頁。

57) 鶴見俊輔「翼賛運動の設計者 - 近衛文麿 - 」『鶴見俊輔集・4 転向研究』(筑摩書房, 1991年)所収, 212頁。

58) 『ビルマの豎琴』, 37頁。

59) 『戦争はどのように語られてきたか』, 67頁参照。

60) 『ビルマの豎琴』, 186頁。

61) たとえば、奥泉光は次のように言う。「あまりに図式的で、ここまで露骨に図式的だと、もうほとんど面白いとしか言えないですね(笑)。戦後を彩ってきたさまざまな言説の原型が全部出揃っていて、しかも非常に低レベルだと断言せざるを得ない」。『戦争はどのように語られてきたか』, 68頁。

62) 同書, 70頁。なお、大政翼賛会文化部長高橋健二については、拙論「高橋健二、闘う文化部長——第一高等学校と大政翼賛会文化部——」小岸昭他編『ファシズム

の想像力』(人文書院, 1997年)所収, を参照していただければ幸甚である。

- 63) 「昭和の精神史」, 121頁。これは東京裁判に対する疑念を述べた文章に登場する。広田弘毅を擁護しようとしているのだが, 「これは, 自分の勤め先の学校という小さな世界で痛感したことを, 拡大した判断だった」と続く。あるいはまた, 別の場所でこうも言う。「戦争中に, 日本でも, もっとも良心ある智識人が翼賛会に入ってその文化部長になった, ということがあったそうですね。ドイツにもそういう人はありました。その人たちはナチスに入って, その一機関となってはたりました。かれらはつぎのように考えたのです。——われらの国はいま軌道を外れて盲目的に驀進しつつある汽車のようなものだ。所詮とめることができない汽車ならば, ただその後尾の客車に坐って不平をいったり陰口をきいたりしていても何にもならない。むしろすすんで機関車に入って, 無謀な運転手の手をおさえて, 車を軌道にのせるべく努力すべきだ。こう考えて, かれらは敵の組織の中に入って, 相手の中からはたらきかけようとしたのでした。これが, なお残された唯一の道だったのです。かくてかれらは政治家になりました。あの条件の下にあっては, これが良心ある者のとるべきおそらくもっとも正しい男性的な道だったのです」。「智識人の裏切り?」『竹山道雄著作集3』所収, 101頁。この大政翼賛会文化部長は初代の岸田国土を指していると思われるが, 高橋健二への含みももちろんあるだろう。
- 64) 昭和の年号を使用したほうが時代の在り様を伝えるのに適当と思われるときは, それを用いた。
- 65) 因みに, このころ公開されて好評を博したドイツ映画『制服の処女』や『嘆きの天使』も学校物語に属する。ギムナジウム生たちが戦争に行く『西部戦線異状なし』は, 学校物語でもあり, 同時に戦争物語でもある。
- 66) 高橋英夫『偉大なる暗闇 師岩元禎と弟子たち』(講談社文芸文庫版, 1993年), 10頁。
- 67) York-Gothart Mix : Die Schulen der Nation. Bildungskritik in der Literatur der frühen Moderne. Stuttgart, Verlag J.B.Metzler 1995. S.5.
- もう一つ, 『少年時代の変転』の例外点を述べておくと, この作品では, 当時のドイツの学校小説に特徴的なホモエロティシズム(高橋英夫が架空の竹山教授に「ハンスや親友のヘルマン・ハイルナーの悩み」と言わせているのは, このことでもあると思われる)が無害化されている。カロッサの小説では, ある悪意と誤解によって「無実の罪」(同性愛)に落とされそうになった主人公は結局は救われるのである。
- ところで, 『ビルマの豎琴』にもホモエロティックな要素が欠けているわけでは

永遠の一高生

なかろう。「うたう部隊」の人気の中心にいる水島上等兵は、「まだ髯もうすい」「大きな澄んだ目」をした青年である（15頁）。ある日彼は強盗に衣服を盗られ、バナナの葉を腰にまいただけの姿になってみんなの喝采を浴びる。また、竹山は水島のモデルのひとりとなった島田正孝（タラワ島で戦死）を、こう描いている。「彼はやや細くてしなやかな体をした美少年で、この人が入学してきた最初の時間に、文甲一の教室の窓際の前の方に陽の光を浴びて坐っているのを見て、『ああ、あそこに感じのいい人がいるな』と思った。まだういういしくあどけない少女のようなところがあり、ときどきはじっと放心してみえた」。「空地」、212頁。

Die ewige unschuldige Jugend —Zur Sendung der japanischen Germanistik in der Nazizeit—

Rieko TAKADA

Michio Takeyama (1903-1984) war einer der renommierten japanischen Germanisten. In der Kriegszeit musste er als Professor eines Elitelynasiums traurige Nachrichten erhalten, dass seine zu Felde gezogenen Schüler gefallen waren. Gleich nach dem Kriegsende schrieb Takeyama zur Erinnerung an die Gefallenen einen Kriegsroman, der damals ein Bestseller wurde.

Der vorliegende Aufsatz ist ein Versuch, aus Takeyamas Kriegsroman eine verborgene Struktur der japanischen höheren Schule herauszulesen.

In den dreißiger Jahren wurden viele deutsche Kriegsgeschichten als Gegenwartsliteratur von japanischen Germanisten übersetzt. Auch Takeyama übersetzte 1936 Hans Carossas „Rumänisches Tagebuch“ ins Japanische. Carossas Tagebuch im Kriege und „Kriegsbriefe gefallener Studenten“ (übers. 1938) wurden damals von japanischen Studenten viel gelesen und waren sehr beliebt. Die Opferbereitschaft und Tapferkeit der deutschen Bildungsbürger machten auf die jungen Intellektuellen in Japan einen starken Eindruck. Takeyamas Kriegsroman ist ein Märchen, das keine Wirklichkeit des japanischen Militärs darstellt, sondern das Ideal des in Japan rezipierten deutschen Kriegsromans nachahmt.

In den meisten von den Intellektuellen geschriebenen japanischen Kriegsromanen, die allerdings erst nach dem Ende des Zweiten Weltkriegs publiziert worden sind, entpuppt sich das kaiserliche Militär als etwas

unmenschlich Grausames. Und tatsächlich herrschten im japanischen Militär Egoismus, Unterdrückung und Schmeichelei. Dort wurde besonders das Intellektuell-Geistige gehasst.

Der Gegensatz zwischen dem Militär und der Geistwelt der höheren Schulbildung war ein Merkmal des modernen Japans, das sich wahrscheinlich in westlichen Ländern so nicht beobachten lässt. Auch Takeyamas Schüler mussten unter Grausamkeit und Ungerechtigkeit im japanischen Militär leiden, obwohl sie als junge Soldaten eigentlich für das Vaterland opferbereit waren.

Am japanischen Gymnasium, an dem damals nur männliche Elitestudenten zugelassen waren, wurde auf die Opferbereitschaft und Freundschaft unter erwählten Männern großer Wert gelegt. In diesem Sinne hatte das System der japanischen höheren Schulbildung vor dem Kriegsende einen typischen Männerbund-Charakter, den auch das idealisierte deutsche Militär in den Augen der Japaner zu haben schien. Die jungen Studenten glaubten noch an diese japanische (oder deutsche?) Männlichkeit, um dann von der Wirklichkeit des Militärs enttäuscht zu werden. Ihre edle Männlichkeit bewährt sich erst in einer fiktiven Welt ihres Professors Takeyama.